

松廼羽衣

〱風早の 三保の浦曲を漕ぐ船の 浦人騒ぐ波路かな

伯竜「これはこのあたりに住む、伯竜と申す漁夫にて候」

〱げにのどかなる朝霞 四方の景色を見渡せば あれなる
松に美しき衣かかれり いざや取りて 我が家へ帰らん

天女「のうのうそれこそは羽衣とて、たやすく人に与うべきものにあらず、返させ給え、
返させ給えのう」

〱吹く春風に誘い来る 姿を三保の松原や 霞に裾は隠せ
ども まだ白妙の富士の顔

伯竜「さては天女にましますかや、よき物得たり」

〱とうち喜び 返す気色もなかりける 今はさながら天人
も 羽なき鳥の如くにて 飛行の道も絶えぬると かざし
の花も打ちしおれ 五衰の姿あらわれて 露の玉散るばかり
なり 〱伯竜はそれとみて いかにもあまり御痛わし
されども衣を返しなば そのまま天にや昇らん 〱いや
とよ我も天乙女 たとえ世界は変わるとも 慕う心はただ
一筋に 思い染めにし恋衣 契り結ばん女夫松 やがて小
松の色添えて 〱夢か現か疑わしくも 独り淋しき手枕に
妹背を渡す鵲の 天津乙女を我が妻と 睦み合うのを樂し
みに 〱賤が手業もまだ白波の 寄する渚に千代かけて
変わらぬ松の深緑 心のたけを推してと 〱いとも床しき
その風情 〱さあらばかねて聞き及ぶ 天女の舞を今こ
で 奏で給えと勸むるにぞ 〱乙女は衣着なしつつ かり
に東の駿河舞 〱思いは胸にうち寄する 波の鼓のそれな

らで へ虚空に響く音楽に へ霓裳羽衣の一奏で 雨に潤
う花の顔 連理の枝に比翼の鳥 翅交わして羨まし へ面
白や 妙なる薰り花降りて 天の羽衣吹き返す 風に乗じ
て ひらひらひら昇り行方も白波に 霞彩る乙女の姿 し
ばし留めて三保の浦 繁れる松の常磐津の へ波うち寄す
る岸沢の 系残して伝えける 系に残して伝えける